

ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（18）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide18/

——前代未聞の恥ずかしい臨床研究——

赤い罨

ディオバン臨床研究不正事件

（桑島巖著 日本医事新報社 2000円税別 2016年9月刊行）

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新の知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしています。査定歴20年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。今回取り上げるのは「ディオバン事件」、つまり研究不正。

ディオバン事件とは・・・ノバルティス・ファーマが発売した血圧の薬（ディオバン）をのむと、血圧が下がるだけでなく他の降圧剤にくらべて、心臓病や腎臓病などの合併症も起こりにくくなるという結果の論文を京府立医大・慈恵医大・滋賀医大・千葉大・名大から国内外のジャーナルに発表し、それをノバ社が宣伝材料に使うことでディオバンは爆発的に売れました。ところが、それらの大学から出された論文のかなりの部分がノバ社のからんだインチキなしろものであることが判明。さらには、それらの研究そのものにノバ社の関係者も携わっていたこともばれて、論文は撤回され、ある教授はやめさせられ、ノバ社と社員が厚労省から刑事告発される・・・という事件です。この10年くらいの間の事件。



嘘で作り上げられたメリットを信じてか、信じたふりをしてか、多くの医師によって薬価の高いディオバンが大量に処方された結果として、国民（健康保険）と患者（自己負担部分）に総額年間200億円の損害が生じたとする試算もあります。そんなディオバンは今も売られています。

本書「赤い罨」は、まさにその論文のインチキに気づきそれをあばいた桑島先生本人が書いた本。いやあ、インチキのばれる発端、告発への居直り、右往左往する学会・・・推理小説みたいで面白いです・・・しかし、なんだかだんだん悲しい感じにもなります。わかってみればあまりにもチープなインチキのオンパレードなんですよ。

ワセダクロニクルの回（2017年11月）でも取り上げましたが、薬の世界は「なんでもありなのか」と考えてしまいどっと疲れてしまいます。巨大資本のメガファーマに屈して、お先棒を担いでしまう医師の面々にも。STAP細胞の事件でもそうでしたが、ネット社会は名声も広めますがインチキを暴くことにもパワーを発揮するということですね。

本書は刑事裁判の判決前に出版されましたが、その後の東京地裁では「論文のインチキは認めたものの誇大広告にはあたらない」という判決（2017年3月）でした。これまた処方薬のマーケティング手法がわかってないなあ、という印象です。控訴中ですが、今のところ売ったもん勝ちの様相を呈しています。

どんな医療が行われるか・どんな薬が処方されるかは民間保険にも大きく関わってくるところです。これまで国民皆保険の中で医療の質は医療者の性善説により支えられてきたとも言えますが、時代は変わってきたようですね。本書を読めば、医者が、あるいは医者だからこそ(?)、名誉欲や金銭欲のためにそんなことまでする?!・・ということを痛いほど学べます。医者の行動原理も多様化しています、拝金主義者が増えていることも事実。そんなことを念頭において診断書や治療内容明細から読み解かなければならない・・そんな時代です。(査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2018年3月)